旅館の脇から海へと下ってゆく小道は、よほど目をこらさなければ見つけられぬ程暗がりに溶け込んでいた。

従業員に見つかって、またぞろ先日のような騒ぎになっては元も子もない。
真山は足音を立てぬよう、砂利を敷き詰めた旅館の正面を避け、植え込みの影を慎重に気配を消しながら小道の入り口までたどり着いた。

ふと旅館の窓に目をやった。

ぽつぽつと灯った照明、時折よぎる人影。
漏れ聞こえる泊まり客達の声。
何の関わりも無い者同士がひとところに集い、ある者は喧噪に明け暮れ、ある者はいっときの休息に吐息を漏らし、またある者はじっと夜を見つめる。
宿とは小さな街そのものだと真山は思った。

ストーカー、誘拐犯、そして鴉…
夜の街外れに息を潜めうずくまる者達
僕の相手は、いつもそんな奴らばかりだな

口元に小さく皮肉の笑みを浮かべ、真山は道の奥へと身を踊らせた。

◇

「…秀司…さん？…」

碧の額に濡れ手拭いを置いた恵美子が背後の衣ずれの音に振り返ると、眠っていた筈の乃木秀司が布団から身体を起こして天井を睨んでいた。
くわっと目を見開き、青白い顔を上向けたまま微動だにしない。

「秀司さん、私が判る？　秀司さんっ！」

病院から連れ出す時に着せたままのスウェットの肩を掴み、恵美子が秀司の身体を揺さぶった。
幾度も幾度も揺さぶり続ける。

　　がくんっ

シーソーが傾くような勢いで秀司の顔が正面を向いた。
そのままゆっくり、ゆっくりと恵美子の方へ頭を捻る。
恵美子の内から沸き上がる喜びが、喉の途中で凍りついた。

秀司は笑っていた。

満面の笑みの何処にも、何の感情も無い笑顔。
もの凄い笑顔だった。
見る者を震え上がらさずにはいられない、非人間的な笑顔。

身動きひとつ出来ず固まってしまった恵美子の服の裾を、小さな手が引いた。

「…ダメ…離れて…」

横たわっていた碧が懸命に腕を伸ばし、消え入りそうな声で警告した。

「それ…おにいちゃんじゃない…違うところにいっちゃった、途中で…うち、ちからなくて引っ張れなかった…こっちに…」
「ちがうって、それじゃ…」

…　えぇ〜みぃぃぃ〜　…

笑いながら、秀司は恵美子の腕に喰らいついた。

◇

激痛と驚愕が恵美子から正常な思考を奪っていた。
まるでゾンビのように、血だらけの口で自分の腕の肉を貪る元婚約者…
彼女は、ただ喰われるがままだった。

「しゅうじ…さん…わたしが…わかるのね…よかった…」

えぇみぃぃ
えぇぇえぇぇみぃぃいぃぃ
いいいぃぃぃいぃいぃ
いいいひひひぃぃぃ
あばあぶぁ…

乃木秀司は恵美子の目を真っ直ぐに見ながら腕を喰い続けていた。
笑いながら。

「おねえちゃん…ダメだって！　おねえちゃん！！」

必死に起きあがって服を引っ張る碧を恵美子が見る。
微笑んでいた。泣きながら。

「みて、秀司さんが…帰ってきたよ…ほら」
「ちがう！　ちがうよぉ！　しっかりしてっ！！」
「…こんなに嬉しそうに…しゅうちゃんたら…」

またゆっくりと秀司の方へ顔を向けた。

狭い部屋の中に、もの凄い血臭が立ちこめていた。
碧は身体を捻りベッド代わりのソファから転がり落ちた。
片腕でソファの端を掴み、火のような呼吸を繰り返しながら何とか立ち上がった。
高熱と脱力感、ひっきりなしに続く頭痛で立っている事すら難しかったが、目前の修羅場を一瞥すると戸口に向かって歩きだした。
壁で身体を支え、何度もつまづき、立ち止まりながらやっとの思いでドアまで辿り着く。

簡単なシリンダーロックの鍵だった。でもそれが開けられない。
視界がグルグルと回り吐き気がこみ上げてくる。
どこが鍵かよくわからなかった。
身体を支える手を壁から放したら立っていられない。
どうすればいいか判らなかった。

ドアにぶつかり、碧はそのままへたり込んだ。

判らないまま、ドアノブらしきものに片方しかない腕を伸ばし必死でがちゃがちゃと捻り、叩く。

不意に鈍い金属音がして、ノブがぽろりと抜け落ち碧の前に転がった。
すっと細く開いたドアの向こうで、会ったことのない男が屈み込んでいた。
素早く中を睨むと、男は一挙動でドアを開け室内に踏み込むと碧を抱きかかえた。

「佐野　碧ちゃんだね？」

男が小声で問う。
碧は首の動きだけで答えた。

「君を連れ戻しにきた。衣笠恵美子はどこにいる？」
「あ…そこ…はやく…おねえちゃんが…」
「ここにいて」

男…真山は碧を床に横たえると、滑るように部屋の中へと踏み込んだ。

◇

目を覆わんばかりの惨状であった。
さすがの真山がつかの間、絶句して立ちすくんでしまう。

だが次の動きは素早かった。
恵美子の背後に三歩で近付くと、何気なく右手を前へ差し出したのだ。

血だらけの口を開けたまま乃木秀司の動きが止まった。みるみる顔色が青黒く変わる。
真山の右手は指圧師のように握られ、突き出た親指の先が秀司の鳩尾に深々と突き刺さっていた。
秀司は笑ったままグズグズと床に崩れ落ちた。

「衣笠恵美子、だな」

血だらけの腕を差し上げたまま、恵美子は答えなかった。

「彼が乃木秀司か。何があった？」
「…」
「答えたくないならいい。あの子は連れてゆく、君を警察に渡すかどうかは僕の依頼主しだいだ」

手近な救急箱をとり、真山が包帯を傷に巻いてゆく間も恵美子は呆けたように為すがままにされていた。

「これでいい。止血はしたが酷い傷だ。早く医者に見せたほうがいい。いくぞ」
「駄目、思い出してくれたのよやっと！　どんなになったって、絶対においていかないっ！！」

無事なほうの腕で真山を突き飛ばすと、恵美子はうずくまる秀司に覆い被さった。
下から睨みあげる目に尋常でない光が点っていた。

真山は左手を、再びあの指圧のような形…柔術で用いる当身用の拳形で、外傷を与えずに相手の動きを封じるのに使う…に握ると、冷たい目で恵美子を見下ろした。

「理由はどうあれ君は誘拐犯だ。そしてあと少しで傷害罪、下手をすれば殺人罪にもなりかねなかった。あんな小さな子に危険な行為を強要した責任はとってもらうぞ」
「…何がわかるのよ…」
「？」
「探偵なんかに何がわかるってのよ！　わたしが何故、どうして碧ちゃんを連れ出さなければならなかったか、ここで何をやっていたか、あなたなんかに判る訳がない！　どうせ金だけ貰って野良犬みたいにそこらじゅう嗅ぎ回ってたんでしょうが！」
「精神的に未熟な子供のサイコインは危険だ、心には光もあれば闇もある…九十九はそう言っていたよ」

冷たい笑みを浮かべる真山の言葉に、恵美子が目を大きく見開いた。

「…あなた…だれなの…」
「僕は真山。九十九君とは古い付き合いでね」

「九十九先生…の？…」
「彼の兄弟子、と言えばいいか。跡継ぎは僕かアイツだとよく言われたもんだ。もっとも僕はとっとと就職し、アイツも身体より心に興味があるとかで精神科医を志しちまったんで、結局、僕らのいた道場は潰れてしまったがな」

真山がすっと屈み込んだ。

「お喋りは終わりだ。おとなしく僕と来るかい？　このありさまでは、彼も九十九の所に連れてゆかねばならないだろう。どのみち君一人の手には余る」
「わたし…わたしは…」

恵美子が返事に詰まった

「時間が無い。佐野碧も見たところ危険な状態だ、嫌なら手荒にやらせてもらうぞ」

左の拳を腰に引き付け、刺すような声で真山が促した。
そのときだった。

うごあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ一！

悶絶していた筈の秀司が飛び掛ってきた。

「くっ！」

恵美子に注意を向けていた真山は不意をつかれ押し倒された。
首筋に咬みついてこようとする頭を必死に下から押さえる。凄い力だった。
病的な痩身の何処から沸いてくるのか判らぬ狂的な力で秀司は真山を組み敷き、黄色い歯をがちがちいわせて喰いつこうとしてくる。恐怖の咬みつきを防ぐのに精一杯の真山は、そのまま秀司ともつれ合い床を転げ回った。

　！！

立ち上がった恵美子が、部屋の外へと走り出てゆくのが見えた。

逃げる気か！？

真山は、いちかばちか左腕を突き出した。
涎を吹き散らしながら秀司がそれに喰らいつく。
瞬間、開いた右手の指で撫でるように秀司の目を払った。
視界を奪われた秀司の動きが止まる。
抱きしめようとするかのように、真山の両手が左右に大きく開いた。

パァン！

掌が頭を挟み込むように打ちつけられると、秀司がどうと真山の上に崩れ落ちた。

八葉（はちよう）の打ち

鼓膜を破り脳に衝撃を与え、一瞬で相手を倒す技であった。

ぐったりともたれかかる身体の下から這い出してきた真山は、荒い息を整えながら足元を見下ろした。
秀司は緩慢な動作で、それでも起き上がろうともがいていた。

こいつをくらっても動けるのか…

人間離れした狂気のタフネスは、真山ですら背筋が薄ら寒くなるものであった。

◇

部屋の入口に、碧を抱きかかえた恵美子が立っていた。

「今よ！　今ならもう一度潜れる、さぁ！」

腕の中の小さな身体を二度、三度と揺さぶる。

「お願い、これが最後よ！　秀司さんを連れ戻して！　あなたしかいないのよ！！」
「…よせ…」

腕の咬み傷を押さえながら真山が言った。

「まだ判らないのか。よく見ろ、その男も見てみろ！　見るんだっ！！」

立ち上がれずに床でのたくっている秀司を指差した。

「アンタがやってる事はな、とうの昔に壊れちまった男を今度こそどうしようもない程ぶっ壊す為に小さな女の子を壊そうとしている、そういう事なんだよ。何処にも、誰にも救いなんかない」
「嘘。そんなの嘘よ。あなたが邪魔しなければ…この日のために私は生き続けてきたの！　失くしたものを取り戻そうとしちゃいけないっていうの！！　あなたにそれを邪魔する権利があるっていうの！！」
「アンタは失敗した。これ以上は無駄だ」
「無駄かどうかやってみればいい…」

恵美子の目に、もう理性の光は無かった。

腕を押えていた真山の右手が下に降りた。
さっきとは違う形に握られる。
堅く握られた拳の真ん中から、中指の第二関節が鋭角に飛び出していた。

中立（なかだて）一本拳。急所を攻め『殺す』為の拳形。

真山の表情から、拭ったように激情が消えていた。

「…狂った元婚約者に肉を喰われてもまだ現実を直視出来ず、犠牲者を増やそうとしている。もう何処までいってもアンタに救いは無い。あるのは埋められぬ自己満足だけだ。今すぐその娘を離せ。離さないなら、僕がここで終わらせる」

能面のような顔で、静かに真山が告げた。
血走った目で素早く辺りを見回した恵美子は、棚の上に置いてあった鋏をひっ掴んだ。

真山はもう何も言わなかった。
ただ滑るように距離を詰める。
鋏が真っ直ぐに突き出された。

半身を捻ってかわした真山の拳が、躊躇い無く恵美子の顔面にめり込んだ。

◇

その声がなければ、間違いなくそうなっていたであろう。

「真山さんっ！」

聞き覚えのある叫び声が、真山の拳を止めた。

「殉くん…」

堀川殉が、入口からこちらを見ていた。